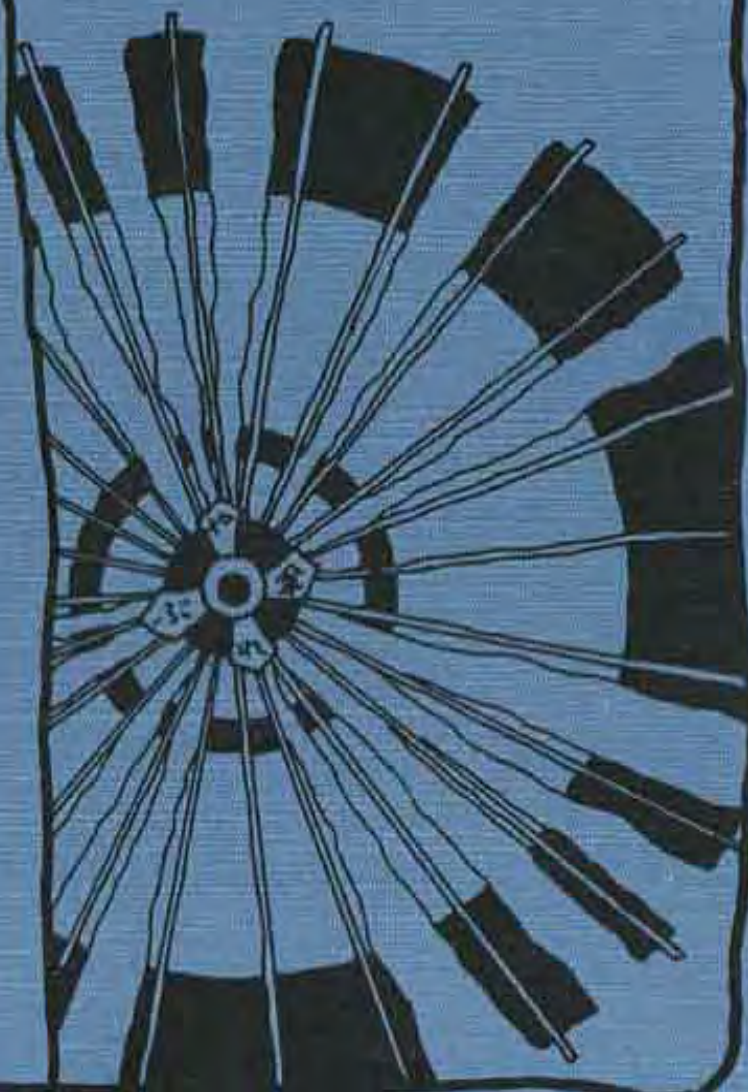


やぶれ傘



九十一号

二〇一六年八月

舟虫のもとのところに戻りみる	根積空次
トタン葺き納屋に雨降る紅鬘葵	大島英昭
炎昼のかたまつてみる窓の外	きくちきみえ
フアド終わりたり扇風機回る音	藤井美晴
老鴛のこゑを近くに避暑小屋	廣瀬雅男
あぢさゐの花つけぬ某切つて晴れ	井久保 融
鈴掛の落葉踏みくる乳母車	瀬島酒望
網の大鳥居より登山道	青谷小枝
畑中へホースのひかれ茄子の花	渡邊孝彦
柿の木の下蔭を行く藪	白石正朝
大雨にならずに夏の日は暮れて	小山陽子
見え隠れして滑岩原の夏帽子	菊池洋子
突堤に撒餌ひからぶ夏の雲	秋山信行
革張りの本の指あと重びにけり	安藤久美子
走馬灯しきりに犬の吠えてをり	有賀昌子

抄 集 句 傘 れ ぶ や

大 崎 紀 夫 選

戦前の香りの館百日紅	久世孝雄
目をつむり腹這ひの夫はたた神	天野美登里
片陰にあふるる人や赤信号	松村光典
藤椅子に深々と腰掛けにけり	村田 武
鉢植ゑの霞袋が店先に	森美佐子
休日のブルドーザーに大西目	藤本 実
カウンターに大々が置く夏帽子	泉 一九
子が群いで賑はふパン屋花サポテン	岩藤礼子
髪のをを明るく染めし夏始め	岡田香緒里
万延の文字薄れたる幕洗ふ	亀岡綾子
三人の寝息こもこも明易し	菊地葉子
木苺を摘むや高架を新幹線	齋藤恵子
香合は神代杉や夏座敷	貫井照子
4Bの鉛筆で描く初夏の山	野口希代志
昭和四年定備武闘の書を曬す	橋本美代

日の盛り

大崎紀夫

剥は釣れず馬面剥ばかり
飛行船が向き変へてゐる麦の秋
役場前過ぎて終点麦あらし
梅雨晴れ間砂丘に虫の這ひし跡
あたらしき蠅取りリボン吊られけり

角曲がつてもぴりぴりと日の盛り
流木の灼けたるに腰おろしけり
とことこと来てとこと立つ羽抜鶏
巴里祭の夜の新宿に雨は降り
浮き沈みして流れゆく竹落葉
亀の背へ氷雨こつこつ当たりゐる
遠くかみなりぼんやりと空白く

船 虫

根橋宏次

潮の香は夾竹桃のみち抜けて
鯉の口ぽかりぽかりと百日紅
舟虫のもとのところに戻りゐる
虎杖の咲いて道らしからぬ道
天辺に吹かれてゐたる行々子
にはとりの鳴いてたうもろこしの花
一寸だけ正座してみる水やうかん
かるの子の半分ほどは草にをり
田のへりの萍に風吹いてゐる
食堂は漁港の端に雲の峰

夜店

大島英昭

夏草のうつすらとあり
転轍機
蟻ぢごく宵には雨といふ予報
鉄塔を囲む植田となりけり
椎の木が茂り守衛は守衛所に
我楽多が捨ててありけり
銭葵
夏蝶が来てぽつぽつと雨が来て
土の香がむつとアガパンサスの花
お囃子が聞こえ夜店が見えはじめ
夕風の涼しさ水を飲みけり
トタン葺き納屋に雨降る紅蜀葵

炎 屋

きくちきみえ

向き変へる目高の波紋ありにけり
あぢさゐの後ろ鳥居と小暗がり
あぢさゐの根方に水を撒く八百屋
舟虫に肩向けて入る露天風呂
噴水の南の音へと変はりゆく
曇天を背負ひて蟻は蟻穴へ
炎屋のかたまつてゐる窓の外
燕の子四羽続いて戻りくる
子燕の口のひとつが見当たらず
石段に座つてたべるかき氷

半夏生草

藤井美晴

枇杷の葉が光る
臯月の高曇
杉を伐るにほひとおもふさつき晴
そよりともせず
昼過ぎの半夏生草
芙美子忌の雨に打たるるジギタリス
裁判所跡ひめむかしよもぎ咲く
晴れにけり夾竹桃の花咲いて
フアド終わりたり扇風機回る音
露伴忌の谷中の坂の大西日
風少し白雨のあとのプラタナス
打ち水に濡れたるテラス雀来る

老 鶯

廣瀬雅男

湖に鳥のこゑして明け易し
真白なる綿雲ひとつ梅雨晴間
湯治場の川をおはぐるとんぼかな
明けやらぬ商店街を夏つばめ
老鶯のこゑを近くに避雷小屋
夏草の中より雀飛びたてり
ひとつ山あればひとつの夏の雲
石段にパラソル開く出店かな
片陰を伝ひ銀座の裏通り
組まれゆく踊り櫓や日曜日

青 田

丑久保勲

青梅を落とす脚立の三段目
米原を過ぎて青田となりにけり
あぢさゐの花つけぬ茎切つて晴れ
老鶯を室生寺駅で聴きにけり
大蟻と小蟻の列の交差して
台所で皿を置く音 夏暖簾
クロワッサン残つてゐたる夜店かな
灯の入りし祭提燈イタめし屋
ふるふると葉の先つちよの芋の露
連中は浴衣姿で出番待ち

乳母車

瀬島酒望

都幾川にニセアカシアの咲く畔（ほとり）
空き缶に当たたる雨垂れ走り梅雨
流鏑馬の馬に乗る子にひとだかり
瓶詰めの冷酒の蓋の馬鹿になり
境内に白さるすべり水子塚
花合歡や三時を知らず時計台
蚊喰鳥飛ぶ境内に綿飴屋
売り物の庭石積まれ竹煮草
鈴掛の落葉踏みくる乳母車
河童忌や海軍カレー食はす店

空梅雨

青谷小枝

避け難く踏む楊梅の実なりけり
塚ほどの窯跡ほととぎすしきり
梅雨深し古き判子にブラシ掛け
蒸し暑き夜を新宿のハイボール
椅子提げて帰省のバスの列につく
水泳教室学校脇の川堰きて
二人して持つ手拭ひに鮎掬ふ
兵児帯の絞りぷつぷつ冷し酒
銅の大鳥居より登山道
空梅雨の飛行機雲の切れつ端

蓮浮葉

渡邊孝彦

踏み幅の変はる階段走り梅雨
畑中へホースのひかれ茄子の花
高台の新樹の先にクルス見え
手水鉢かたへの鉢に蓮浮葉
明易しブーゲンビリア咲く館
砂浜へほたるぶくろの急な坂
雨すぐにきさうな暗さアカンサス
溶岩の上を走り根森涼し
雨風に芋殻を焚いてむにやむにやと
一列に吊られ風鈴鳴り渡る

墓

白石正躬

初夏の山毛櫨の木立に休みけり
川からの夕風わたる麦の秋
柿の木の下蔭を行く墓
土手を刈る草の匂ひの日の盛り
渡し場の腰かけ石に梅雨の雨
かたつむり雨あがりたる朝の月
山桑の実の紅と紫と
きれぎれに風が青田の方より来
物置に這ひ上りたる花南瓜
夏の川釣り人の浮子静かにて

舟虫のものとどころに灰りある	根積空次
トタン葺き納屋に雨降る紅蜀葵	大島英昭
炭火のかたまつてみる窓の外	きくちきみえ
フアド終わりたり風風機回る音	藤井美晴
老鷺のこゑを近くに避雷小屋	廣瀬雅男
あちさみの花つけぬ某切つて晴れ	井久保 融
鈴掛の落葉踏みくる乳母車	瀧島酒望
網の大鳥居より登山道	青谷小枝
畑中へホースのひかれ茄子の花	廣庭孝彦
柿の木の 下 蔭 を 行 く 藪	白石正則
大雨にならずに夏の日は暮れて	小山陽子
見え隠れして浴岩原の夏帽子	野池洋子
突壇に撒餌ひからふ夏の雲	秋山信行
葎葉りの本の指あと蕈びにけり	安藤久美子
走馬灯しきりに犬の吠えてをり	有賀昌子

抄 集 句 傘 紀 大 崎 夫 選

戦前の香りの館百日紅	久世孝操
目をつむり腹這ひの大はたた神	天野美登里
片陰にあふるる人や赤信琴	松村光典
藤椅子に深々と腰掛けにけり	村田 武
鉢植糸の 袋袋が店先に	森美佐子
休日のブルドーザーに大西日	瀧本 実
カウンターに夫々が置く夏帽子	泉 一 九
子が離いで賑はふパン屋花サボテン	岩藤礼子
髪のをを明るく染めし夏始め	岡田香緒里
万延の文字薄れたる幕洗ふ	亀岡睦子
三人の寝息こもこも明易し	薮地葉子
木苺を摘むや高梨を新幹線	齋藤恵子
香合は神代杉や夏座敷	貫井照子
4Bの鉛筆で描く初夏の山	野口希代志
昭和四年定価表圖の書を曬す	橋本美代